

「達成度テスト(発展レベル)(仮称)」の複数回実施に関する検討メモ

資料 6 - 2

1. 複数回実施の主な目的

- 受験生が本来の実力を発揮できるよう、再挑戦の機会の付与
- 再挑戦の機会があることによる受験生、実施主体双方の精神的重圧の緩和
- 達成度テストの資格試験的利用の促進(段階別成績提供を併用する場合は、さらに効果的)
- 大規模な自然災害、交通機関のトラブル、新型インフルエンザ等による受験機会の逸失の回避

2. 実施時期(仮に2回実施するとした場合)

	メリット	デメリット
1回目: 夏or秋 2回目: 1月	○実施間隔が広いいため、2回目試験時までには1回目試験の成績提供が可能となる	○現役の受験生に対しては未だ学習していない内容について1回目の試験をすることとなり、高校の教育活動への影響が大きい ○受験生の心理として、2回受験せざるを得なくなる
1回目: 1月 2回目: 1月	○高校の教育活動への影響が少ない ○実施時期が近接しているため、1回目試験の成績と2回目試験の成績の間に学習時間による差がほぼ生じない	○(CBT、IRTを採用しない場合)実施時期が近接するため、2回目の試験時には1回目の試験成績が不明となり、2回受験せざるを得なくなる ○(CBT、IRTを採用する場合も)1回目の実施時期がセンター試験と同時期の場合、個別試験の日程に影響を与える
1回目: 12月 2回目: 1月	○実施間隔が比較的広いいため、2回目試験時までには1回目試験の成績提供が可能となる ○実施時期が比較的近接しているため、1回目試験の成績と2回目試験の成績の間に学習時間による差が生じにくい	○1回目の試験の時期が1ヶ月程度早まるため、高校の教育活動に影響を与える

※ その他、1回目と2回目で内容の異なる試験を実施することも考えられる。

3. 利用方法(仮に2回受験した場合)

	メリット	デメリット
高成績の回の成績を利用	○受験生及び実施主体の精神的重圧が緩和される	○受験生の心理として2回受験せざるを得なくなる
2回の成績の平均を利用 (※1回のみ受験の場合は当該試験の成績を利用)	○2回受験することが必ずしも有利には働かないため、受験生の負担の緩和につながる	○2回の成績が平均化されることに対する不満

4. その他の留意点

- 実施側の負担を考慮すれば、教科・科目数の精選等により1日で実施可能とするなどのスリム化が不可欠
- 円滑な実施には、CBT化及びIRTの採用が望ましいが、導入までに相当の準備が必要(少なくとも8年程度は必要)